

---

# 普通で普通な普通の人

色々と残念

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

普通で普通な普通の人

### 【Nコード】

N7674P

### 【作者名】

色々と残念

### 【あらすじ】

普通で普通な普通の只野並斗は普通で普通に生きていくつもりですが

## プロローグ・箱庭総合病院にて（前書き）

作者の妄想です。

とあるキャラがTSしています。

それでも構わない人はどうぞ。

## プロローグ・箱庭総合病院にて

この世界は異常だ。

俺は普通だ。

この世界では異常な奴等が異常に多くて異常に生きている。  
俺は普通だ。

通常とは異なるから異常。

俺は通常だ。

正常とは異なるから異常。

俺は正常だ。

こんなに普通で普通な普通の俺が。

何故異常な奴等が行く病院に居るんだろうか？

そこんところと思うよ人吉先生？

「安心しなさい。キミは十分に異常よ。只野くん。」

酷いな人吉先生。

普通のサラリーマンになって普通に苦勞して普通な嫁さんと結婚して普通に幸せになって普通に老衰で死ぬという完璧でとても素晴らしい普通な人生を設計している俺が異常なわけ無いでしょう。

「残念だけど普通の三歳児は人生設計なんかしないわ」

とりあえず人吉先生の旦那さんよりも普通だと思いますが。

「それはどういう意味？」

いやだってどう考えてもロリコ。

そこまで言った瞬間。俺の側頭部に人吉先生の蹴りが炸裂した。

普通に痛い。

というか三歳児蹴るなよ人吉先生。

「はい、これで診察は終わりよ只野くん。お疲れさま。」

お疲れさまです。

「まあ貴方なら普通に社会に馴染んで暮らしていけると思っわ。」

当たり前ですよ。

普通に普通に普通の俺が！普通に暮らせないわけ無いでしょう。

「その言動さえ無ければね。」

……無口キャラを目指します。

「はいはい、頑張ってね。只野くんと話してると時間が幾ら在っても足りないからもう終わりにするわね。」

そうですか。

それでは俺は帰ります。

「ええ、また来なさいね只野くん。」

ありがとうございます。と人吉先生に一礼をした後。

普通に素早くドアまで走ってドアノブに手を掛けて部屋を出ようとした時。

「さてと休憩挟んで午後からまた診察か。午後から来る子の名前は……球磨川楔ちゃんか」

俺がこの世で一番関わりたくない奴の名前が聞こえて思わず振り返ってしまった。

「どうしたの？只野くん。」

人吉先生。

今、球磨川楔って言いました？

「ええ、言ってたわよ」

今日はもう早退した方が良いでしょうよ。

球磨川楔とは関わらない方が良いでしょう。

「どうして？」

人の嫌がることが大好きな奴ですからね。

人吉先生も多分というか絶対というか間違いなく何かされますよ。

俺は大事にしていたウサギのぬいぐるみを奪われました。

今頃俺のウサちゃんはどうなっているのか想像するのが怖いです。

というわけで球磨川楔には関わらない方が良いでしょう。

「只野くんがウサギのぬいぐるみが大好きだってことと球磨川楔という子があまり良い性格をしていないってことは解ったわ。でもね……私には心療外科医としての誇りと。どんなに異常な子供でも幸せにしてあげる使命があるの。」

そうですか。



「だから、私は午後も診察を続けるわ」

まあ一応忠告したんで俺は帰ります。

「ええ、ありがとう」

礼を言われることはしてませんよ。

それと、球磨川に会ったらウサギはどうしたのか聞いておいてくれませんか？

「只野くんの愛しのウサちゃんはどうしたの？って聞いてみるわ」

宜しく願いします。

さっきよりも深々と頭を下げて礼をしてから部屋を出た。

人吉先生。

貴女の誇りと使命が折れ曲がらないことを祈っておきます。

まあ普通に考えたら無理かな。

さて、球磨川と遭遇しないようにさつさと帰ろう。

普通で普通の普通の人生に彼女は必要ない。

『僕達つて世間では幼なじみって言っらしいよ。幼なじみの男女と  
いうのは将来結婚しようとか言っらしいよ。馬鹿みたいだよ。ね。実際  
はそんなことしない癖にさ。だから僕達も馬鹿になっってみようか。只  
野くん。二十歳までに僕達が誰とも結婚できてなかつたら僕達結婚  
しようよ。良いよね。悪いはずが無いよね。だっ僕は普通なんだから。  
』 だっ たか。

思い出すだけで寒気がする。

料理が出来なくても良い。

掃除が出来なくても良い。

家事全般が出来なくても良い。

あんな『僕は悪くない』とか言いながら一点の曇りもない綺麗な笑顔で他人をネジでぶっ刺しそうな女の子だけは勘弁してくれ。

只野並斗は心の底からそう思った。

## ブログ・箱庭総合病院にて（後書き）

球磨川さんが持っていたウサギは只野くんのウサギでした。  
という設定にしています。

只野くんがあのも惨なウサギを見たら小一時間位マジ泣きしますね  
間違いなく。

## 第一箱 恐怖のメール（前書き）

作者の妄想です。

プロローグから13年後の話です。

## 第一箱 恐怖のメール

箱庭学園二年一組に所属する只野並斗は今日も普通に弁当片手に食堂へ行き。

普通に自分が作った弁当を食べ。

普通に食後にお茶を飲み。

普通に携帯を取り出して暇を潰していると。

普通な彼の携帯が普通に一件のメールを受信した。

中学一年の頃に携帯を買ってから毎年毎年知らないアドレスからメールが届く。

メールの内容は『後 年だね』と一行だけでとても短い。

て。  
には現在の俺の年齢を足すと20になる数字が毎回毎回入っている。

12歳の時には8。

13歳の時には7。

14歳の時には6。

15歳の時には5。

という感じだ。

そして今年も。アドレスを変えようが受信拒否しようが必ず毎年欠かさず届く恐怖のメールが届いた。

深呼吸して息を整えてから恐る恐るメールの受信ボックスを開くと『後4年だね』という何時もと変わらない一行の下に。

『ああ、それと。箱庭学園に転校することになったから宜しくね。』という文章が書いてあった。

見間違いかと思ったので一旦携帯を閉じる。

開ける。

見る。

閉じる。

開ける。

見る。



閉じる。

開ける。

見る。

閉じる。

開ける。見る。閉じる。開ける。見る。閉じる。開ける。見る。閉  
じる。開ける。見る。閉じる。開ける。見る。閉じる。開ける。見  
る。閉じる。開ける。見る。閉じる。開ける。見る。閉じる。開け  
る。見る。閉じる。開ける。見る。閉じる。

何回見ても何度も見ても。

十回見ても百回見ても千度も見ても万度も見ても書いてあることは  
変わらない。

ああ、見間違いじゃないのか。

「球磨川が……箱庭学園に来るんだな。」

受け入れたく無かった現実を受け入れると普通に普通に普通の俺の平凡で平穏な日々が終わりを告げる音が聞こえた。

ガラガラと瓦礫が崩れる様な感じで心の中の大事なものが崩れる音が脳内で再生中の俺の背中を。

「おいおい、どうした只野。そんなこの世の全てに裏切られた様な顔をして。正直お前には似合わないぜその顔。」

という言葉と一緒にバシバシ叩いてくる人が居た。

本人は軽く叩いているつもりなんだろうけど体格が違い過ぎるから軽く叩かれても普通に痛い。

痛いのに叩くの止めてくれない。

俺が反応するまで叩くつもりかよこの人。

解った解った解りましたよ。

「普通に痛いんで叩くの止めてくれませんかね日之影先輩。」

俺は叩かれて喜ぶ人じゃないんで痛いのは嫌なんですよ。

「話しかけてんのに無視されたかと思つてなー。」

悪い悪い。と笑顔で謝ってくる日之影先輩。

全然悪いと思ってないだろアンタ。

まあ良いですけど。

「ちょっと最高に最悪な事が起こるのが決定したんで落ち込んでたんですよ。それで反応が遅れたんです。」

「お前とはもう一年位の付き合いになるけどよー。落ち込んでるのを見るのは初めてだぜ。レアなもん見れたって喜んでくか。」

「他人の落ち込んでるとこ見といて喜ぶって普通に酷いですよ。とても元生徒会長の言動だとは思えませんね。」

「俺は影が薄くてそんなに目立たないジミーな生徒会長だったからよー。俺が生徒会長だったことを一度も忘れずに憶えているのは

お前だけだぜ。」

「つまり俺が元生徒会長は他人が落ち込んでいるところを見て喜んじやう超絶でドSな鬼畜野郎だ！死ね変態！と叫んでも。周囲の人は元生徒会長つて誰？と首を傾げるだけってことですか。酷い奴等ですね元とはいえ生徒会長のことを忘れるなんて。普通は忘れたりしないでしょう。」

「ああ、そういえば中退した元クラスメートがすげー変態だったな。今は箱庭学園の片隅にある旧校舎の管理人をやってるみてーだけど。」

「いきなりスルーしないでくれませんか。会話はキャッチボールなんですよ。ちゃんと投げ返して下さい。返って来ないと普通に悲しいですから。」

「返答に困ることをお前が言うからだぜ。で、どうだ只野。少しは気分が晴れたか。」

全く。

先輩にだけは敵いませんね。

「ええ、ありがとうございます日之影先輩。楽しく会話が出来たので普通に良い気分転換になりました。」

「礼を言われるようなことはしてねーよ。落ち込んでる後輩を立ち直らせるのは先輩の義務だからな。」

そう言われましてもね日之影先輩。

「ありがたいと思ったらありがとって言うのが普通なんですよ。」

「そーかよ。それじゃー俺はもう自分の教室に戻るぜ。そろそろ昼休みも終わりだしなー。」

「もう身体がジジイだからよー始業時間ギリギリに教室まで走っていくのは辛いんだわ」と言いながら椅子から立ち上がって食堂の出入口まで歩いて行く日之影先輩に。

俺は深々と礼をした。

さてと、明日からは毎日毎日球磨川と遭遇する覚悟を決めてから学校に向かわないと。

ああ、普通に嫌だわ。

## 第二箱 災会（前書き）

作者の妄想です。

週に一回は更新したいですね。



## 第二箱 災会

只野並斗に毎年恒例の恐怖のメールが届いた日の翌日。

七月十五日の放課後。

球磨川楔が箱庭学園時計台一階にて異常十人とその他二人に巻き添え二人の合計十四人を螺で串刺しにして壁に張り付けにしたり地面に釘付けならぬ螺付けをしている頃。

「鼻の部分は赤色の毛糸を使ってみるかな。」

只野並斗は二年一組の教室にて普通に趣味の手芸に勤しんで手の平サイズのウサギのぬいぐるみを普通に五体程作製した後、デフォルメされたウサギの編みぐるみを毛糸で普通に製作中だった。

球磨川楔が箱庭学園理事長室で不知火理事長に。この学園の生徒を抹殺する為に転校してきました。と、通報されそうな事を得意気に話していた時。

「よし、良い感じのヤツが出来たから。帰ろうかな。」

真っ赤な鼻のウサギの編みぐるみを普通に完成させた只野並斗は鞆に裁縫道具と先程作った五体のぬいぐるみを普通に詰め込んでいた。

球磨川楔が不知火半袖と出会って。自分と同じく恋する乙女だと気付いた瞬間。

「フラスコ計画が一時凍結したなう？ いやフラスコ計画って何？」

只野並斗は普通に携帯でツイッターを見て疑問に思ったことを普通に呟きながら下校中だった。

そんな一方では異常なもう一方では普通な出来事が有った日の次の日。

七月十六日の放課後。

何となく嫌な予感と悪寒がしていたので今日は教室に残らないで普通に下校しようとしていたら。

「善吉くーん！何処に居るのーっ！」

善吉くんを探しながら学園内をローラーシューズで爆走している外見が小学生にしか見えない女の子……というか明らかに人吉先生を目撃した。

いや何で此処に居るんですか人吉先生。ああ、普通に保険医として箱庭学園に赴任してきたんですね勿論。人吉先生が着ている白衣の下に箱庭学園の学生服が見えたのは普通に幻覚ですねきっと。だって今年で42歳になる人が学生服を着るなんてこと普通はあり得ませんよね。

色々と疑問が脳裏を過ったけど口に出すのは我慢した。まあ蹴られると普通に痛いんで。昔は思ったことをそのまま言葉にしていたか

ら何回も蹴られました。

あの時三歳だったけど容赦なく蹴られたな。と昔を懐かしみながらぼーっと何処かに歩いていたら。

尻餅をついている桃色の髪の女の子に笑顔で手を差し伸べる人吉善吉くんを見かけた。

人吉先生が探してたぞって言おうかと思ったが。普通に邪魔したら悪い様な気がしたので話し掛けるのは止めておく。いや何か馬に蹴られそうだし。それに……気のせいなら良いんだけどヤバそうな感じがするんだよな。あの女の子。

ちよつと遠くから離れて観ていても解る。何処と無く良い雰囲気の中。女の子が頬を赤く染めながら善吉くんの手を握ろうと手を伸ばした瞬間。

狙っていたかの様なタイミングで人吉先生が善吉くんを発見した。

あの桃色の髪の女の子が本当にヤバい奴だったら普通に助けに行こ

うかと思つてたけど。人吉先生が来たなら大丈夫だな。

まあ普通で普通に普通の俺より人吉先生の方が色々の良いだろう。

しかしそんな考えも虚しく。善吉くんは人吉先生に余程捕まりたくなかったのか。いきなり傍にいる桃色の髪の女の子を抱えたかと思うと。校舎の壁を使って屋上まで駆け上がって行った。

いや普通に有り得ないんだが。というか普通は出来ないだらアレ。万有引力に喧嘩を売って勝っちゃ駄目だろ。ニュートンが普通に落ち込むぞ。そして何故あの女の子を連れて行ったんだ。

普通に色々と混乱と困惑している俺を尻目に。

壁に何本かマチ針を投げ刺したかと思うとそれを足場にピョンピョンと善吉くんの三倍位のスピードで屋上まで跳ね上がって行く人吉先生。

階段つて何の為に有るんだろう。って一瞬普通に思ってしまった俺は間違っていないと思う。

異常な光景を二度も見たせいかは解らないけど何故か普通に疲れたので。

いい加減帰ろうと校門を目指して歩いている途中。

曲がり角を通ろうとした時。何処かで見たことのある顔のセーラー服を着た女の子が。まるで狙ったかの様な見事に絶妙のタイミングで現れて俺の進路を塞いだ。

「んー？あれー？人違いかなー。」

此方を見ながら顎に手を当てて首を傾げているセーラー服の女の子に。

「うん、人違いだ。間違いなく人違いだから帰りなさい。俺も帰るから。」

さよならー。と背を向けて普通に全力で走り出そうとしたが。

『すいませーん。ちょっと悪いんですけど。もう少し顔を良く見せてくれませんかー。』

素早く目の前に回り込まれて顔を両手で掴まれた。

そして数秒間笑顔で俺の顔を凝視した後。

『やっぱりそうだ！只野くん。僕が只野くんを見間違えるわけないよね絶対。久しぶりだねー。元気だった？』

とてもとても嬉しそうにととてもとても綺麗で可愛らしく球磨川楔は微笑んだ。

うん、普通に鳥肌と悪寒がヤバイ。

## 番外の一箱 確かめる方法（前書き）

作者の妄想です。

今回は1ページというふざけた文の量です。

それとちょっとバイオレンスな表現も有ります。

それでも良いという方はどうぞ。



## 番外の一箱 確かめる方法

『僕の気持ちが本物か確かめてみても良いかな。只野くん。』

「確かめないと不安なら。本物じゃないと思うんだが。」

『そうかなー？』

「そうだよ。それで、俺に何をする気だったんだ？」

『只野くんの顔の皮を剥がしても只野くんが好きだという気持ちが変わらないか。』

「いや、それは好きな奴にすることじゃない。どちらかというと嫌いな奴にすることだ。」

『そうかなー？』

「そうだよ。まあ俺が嫌いなら別にやっても良いぞ。」

『じゃあ止めよう。』

「止めるのか？」

『やる気が無くなっちゃったからね。それに僕が只野くんを嫌いになることは有り得ないから。嫌いならやっても良いって言われたら出来ないよ。』

「そうか。」

『そうだよ。』

十四年程前。只野並斗と球磨川楔の二人がまだ幼かった頃。こんな会話が有った。そして三年程前。球磨川楔が中学三年生の頃。

彼女は嫌いな女の子の顔の皮を剥がした。

その女の子が嫌いだった理由は彼女自身の視界を女の子に乗っ取られて見られた事があるからと。その女の子が異常を増やせる存在であり。その女の子自体も異常だったから。そして女の子に異常を渡された事が一番の理由で。

顔の皮を剥がした理由は。顔の皮を剥がしても嫌いだという気持ちが変わらないか確かめる為。見た目や外見が嫌いだという訳では無く。存在自体が嫌いだと確かめる。それだけの為に顔の皮を剥がした。

そして剥がしても良いと思った理由は『只野くんが嫌いな奴にする方法だって昔言っていたから。』というのが理由である。

剥がした皮も。残った肉も。等しく同じに見えたので。満足した彼女は『やっぱり。只野くんは正しいなー。』と。とてもとても嬉しそうに言った。

『いや、ほら良く言うでしょ。性別が違ったら好きになれたかもしれないってさ。だから僕が男だったら好きになれてたかもしれないけど。同性だから気に入らないってことも良く有るじゃない。今回はそういう事だよ。』

『僕は悪くない。だって僕は確かめたかったことを確かめたただけだから。だから僕は何も悪くない。そうでしょ？』と彼女が顔から大量の血を流して倒れている女の子に話しかけていると。

「球磨川生徒会長。少し話があるのだが。」

部屋の入口が開いて知っている後輩が入ってきた。

ノックもせず部屋に入ってきた来た礼儀の知らない後輩を普段の彼女なら叱るところだけど。とても気分が良かった彼女は。床に転がる肉を見ながら震える後輩に。両手を他人の血で赤く染めながら陽気に挨拶した。

『やあ。元気かいめだかちゃん。』

「球磨川アアアア！」

顔の皮を剥がされた女の子の名前は安心院なじみ。

球磨川楔の後輩の黒神めだかの大事な大事な友達だった。

## 番外の一箱 確かめる方法（後書き）

もしかして間接的に只野くんのせいになるんじゃないかコレッて。

……めだかちゃんに知られたら乱神モードで殴られそうな気が。

いや、大丈夫だ。

大丈夫だと思う。

大丈夫だと。思いたい。

現在二つのルートを書いている最中です。

頑張れ只野くんルートと。二重人格な只野くんルートです。

どっちも書いているんですが。

次回更新する時に両方掲載してみようかどうかどうしようか考え中です。

### 第三箱 キャッチ&リリース（前書き）

作者の妄想です。

頑張れ只野くん。

## 第三箱 キャッチ&リリース

[illegible]

上は上で大変そうですね人吉先生。まあ此方は此方で大変ですが。

屋上から大音量で聞こえる熱狂的で情熱的過ぎる熱い想いの籠ったプロポーズに正直ドン引きしながら只野並斗は球磨川楔と格闘中で戦闘中で逃走中だった。

何でこんな状況に成ったんだ。と思いながら。洒落にならない速度で飛んでくる極太の螺を避けて弾いて回避して叩き落しながら逃げる。

ああ、『そうだ。一緒に本屋に行こうよ。只野くん。』って言いながら襲い掛かって来たんだよな今みたいな感じで。

螺を片手に襲い掛かってくる彼女を捌いて崩して投げて普通に女だとは思っていないので。　　というか思えないので。　容赦なく。　手加減

無しで。突き出す様な中段蹴りを入れて蹴り飛ばしてから逃げる。

後方で校舎がぐじゅると嫌な音を奏でながら崩れるのを目撃しながらも逃げる。逃げて逃げて逃げまくる。

「何とか逃げ切ったかな。ああ、もう畜生。制服がボロボロじゃねえか。家にもう一着あるけどアレ冬服だぞ。明日で終業式だから今年の夏は良いけど来年の夏はどうすんだよ。皆が夏服で涼しそうな中で一人だけ冬服とか嫌だよ俺。何か仲間外れみたいな感じになるだろ絶対。やっぱ新しいの買っしかないのかね。ここまで酷いと俺じゃ直せないしな。普通に無駄な出費だよ畜生。あの野郎……いや野郎じゃないか女だから。あの女は昔から俺の嫌がることばかりやりやがるな本当に。だから関わりたくないんだよ。結局俺が昔大事にしたウサギのぬいぐるみはどうなったのか聞くの忘れたしよ。どうせ酷い目に合わされた後に捨てられたんだろうけどな。普通に首とか引き千切られてそうだわ。」

ああ、駄目だ。文句と愚痴を言いながらじゃないとイライラし過ぎて歩けない。これは暫く独り言が止まらねえな。気味が悪いと思われそうだから人氣が少ない道を選んで帰ろう。

「それに中学の時だって破壊臣だか何だか知らんが金髪ロン毛の胸元開けすぎの不良が俺に襲い掛かってきやがったのはあの女が原因



だつてのをこの前不良くん本人に聞いたぞ。こつちが普通に引く位の凄い勢いで謝ってきたから不良くんは許したけど。」

焼いた鉄板の上でキミの気が済むまで土下座するよ！とか本気の目で言われたら許すしかないだろ。鍋島先輩に聞いた誠心誠意謝る為の方法って言ってたけど。多分先輩は冗談で言っただと思う。本気になる様な後輩もいるので間違ったことは余り教えないで下さい先輩。冗談じゃ済まなくなりますから。

そんなことを考えながら激しい運動で普通に疲れた身体でフラフラ歩いていると。

片眼鏡を付けた俺と同年位の執事服の男とスカートにスリットの入ったセーラー服を着た女子学生という怪しげな二人組を目撃した。何かあの二人もヤバい感じがするな。普通に関わらないようにしよう。と思っていたら何か普通に此方にあの二人組が近付いてきたんだだけ。

まあ、どうせ今の俺じゃ逃げられないし。ヤバいかどうか此方から話し掛けてみて確かめてみるか。

「何か用ですか？これから俺は家に帰るところなんですけどね。」  
そう言っただんな反応が返ってくるか身構えていたら。

「アンタ。球磨川さんの彼氏だろ？」

まず女子学生が突然有り得ない事を笑顔で聞いてきた。

「え？」

とんでもない事を言われて普通に俺が困惑していると。

「聞いた話だと結婚を前提として付き合っているそうですね。」

今度は更に有り得ない事を執事服が言った。

「いや、それ以前に付き合っていないから。」

流石に今度は否定出来たが未だに困惑は続いている。いやだって何でそういう発想に。もしかして球磨川が勝手に言い触らしてるんじゃないだろうな。いや寧ろそれしか考えられない。外堀から埋める気かあの女。何とかして食い止めないと恐ろしい事に。箱庭学園中に広められたら俺の普通な学生生活が終わってしまう。

「照れんなよ。」

このこの～と言いながら肘でぐりぐりしてくる女子学生。頼むから普通に止めてくれ。その反応。そして今の俺が照れているように見えるなら眼科に行きなさい診察料は出しますから。

「これから私達は球磨川さんが居る箱庭学園まで行くんですが。宜しければ貴方も一緒に行きませんか？」

執事服くん。好意で言ってくれてるのは解るけど余計なお世話だから。普通に勘弁してくれ。

「いや、球磨川にはもう遭ったから大丈夫だ。」

というか出来れば二度と遭いたくない。

「球磨川さん本人に聞いてみます。」

携帯を取り出して電話を始める執事服。普通其処までするか君達。

「『一度も会ってないから連れてきてくれると嬉しいなあ。』と球磨川さんは言っていました。」

そう言って執事服が携帯を閉じてポケットに入れると。

「連行決定だな。」

笑顔で俺の右腕を掴む女子学生。

「そうですね。」

笑顔で俺の左腕を掴む執事服。

「というか俺は君達が誰なのかすら解っていないんだが。」

「アタシは志布志飛沫だ。宜しくな。」

女子学生は俺の右腕をしっかりと掴みながらそう言った。

「蝶ヶ崎蛾々丸です。宜しくお願いします。」

執事服の男は俺の左腕をがっしりと掴んだまま軽く会釈してそう言った。

二人の自己紹介が終わった後、両脇からジーっと何かを期待するような目線が俺に直撃する。え、俺もやるの？やらなきゃ駄目？解った解った解りましたよ。

「箱庭学園二年一組只野並斗。宜しくはしなくて結構。出来ればそつとしておいてくれると普通に嬉しい。あと、普通に両腕離して。」

「ヤダ。」

「お断りします。」

「それじゃ自己紹介も済んだことだし。」

「ええ、行きましようか」

両腕を二人に掴まれたまま有無を言わず箱庭学園まで只野並斗は連行されて行った。

え、何この状況。

**没三箱 異常で異常に異常な私（前書き）**

作者の妄想です。

ちょっと短いかもしれませんが。それでも良いという方はどうぞ。

### 没三箱 異常で異常に異常な私

幼い頃にした約束なんて普通は覚えていない。時が経てば普通に忘れてしまう。それにもし覚えていたとしても。守ろうなんて考える奴は居ない。もし居たとすればそれはとても貴重で希少な存在だ。

そんな貴重で希少な存在が目の前に居るわけだが。

悪寒しか感じない俺って駄目なんだろうか。

「お久しぶりですね。球磨川先輩。」

自分の顔を掴む彼女の両手を普通に嫌そうな顔で引き剥がしながら俺がそう言つと。

『昔の様に楔って呼び捨てで良いよ。僕と只野くんは先輩と後輩だけど。それ以前に幼なじみなんだからさ。久しぶりの再会なんだから幼なじみとして話そうよ。』

にこにこ笑顔で今度は俺の手を掴みながら球磨川楔はそう言った。いや何で掴むんですか。



「貴女を名前で呼んだことは一度も有りませんよ。昔から名字で呼んでます。過去を捏造しないで下さい。」

そして俺の手を離して下さい頼みますから。と普通に駄目だろうなとは思っただけど頼んでみたが。

『期待してたのに呼んでくれないなんて。意地悪だね只野くん。相変わらず酷いなあ。』

『駄目だよ。頼んだって離さないんだから。だって離したら逃げるでしょ?』と笑顔で却下されました。ああ、やっぱり駄目か。というか行動が読まれてる。

異常に強い力で掴まれてるから普通に普通に普通の俺じゃ逃げられないか。

仕方ないな。

気は進まないけどアイツに任せよう。

「球磨川先輩。俺はね。貴女に関わりたくないんですよ。出来れば話もしたくない。だから。普通に普通に普通の俺に替わって。」

俺は其処まで言うと言を閉じ。後は宜しく。と心の中で一言伝えてから。自分を眠らせた。

「異常で異常に異常な私が相手をしよう。」

そして瞬時に切り替わった私が目を開け。異常な力で掴まれていた手を振り払い。異常な力で女を殴り飛ばすと。吹き飛んだ女は校舎の壁に勢い良く叩き付けられた。

「久しぶりだな球磨川楔。相変わらず並斗に避けられているようだが。いい加減諦めたらどうだ？並斗がお前を好きになることは有り得ないぞ。」

『久しぶりだね。優斗くん。いきなり殴るなんて酷いじゃないか。』

普段は張り付けたかの様な笑顔を絶やさない彼女にしては珍しく憤怒と憎悪に染まった顔で球磨川楔は侮蔑を含んだ笑みを浮かべる目の前の男……只野優斗を睨み付けた。

「並斗がお前に手を掴まれて嫌がっていたのでね。その一発は並斗に不快感を与えた罰だと思いたまえ。」

まあ一発だけでは足りない様な気もするが。余りやり過ぎると並斗が起きた時に怒られてしまうのでね。

「さて、制裁もしたことだし。それでは私は帰らせてもらおうか。久しぶりに並斗に呼ばれたのでね。今日は久しぶりに私が料理を作ろう。というか寧ろ家事全般を異常で異常に異常な私が異常で異常に異常な早さで終わらせてあげよう。並斗が起きた時のリアクションが楽しみだよ。」

ハッハッハ。と高らかに笑いながら只野優斗は睨み付ける球磨川楔を完全に無視して背を向けて歩き出す。

その無防備な背中に。

『無視しないでくれるかな。』

球磨川楔は渾身の力を込めて十数本の螺を投げつけたが。

「私は今、今日の夕食の献立を考えている。邪魔をするんじゃない。」

振り返った只野優斗にあっさりと全ての螺を受け止められ。全ての螺を投げ返された。

投げ返された数十本の螺が彼女の身体中に満遍なく突き刺さり血が吹き出したが。螺が刺さったという事実を彼女が「無かったこと」にした為。無傷の状態で今も彼女は立っている。只野優斗を睨み付けながら。

「現実を虚構する……か。面白いものを見せて貰った。だが普通に普通に普通な人生を過ごす為にはそんなものは必要ない。異常なんかないのさ。」

『僕だって欲しくは無かったよ。こんな能力なんて要らないって思ってた。だけど。良い使い道を思い付いたんだ。優斗くん。キミの存在自体を「無かったこと」にしてあげるよ。異常が必要ないならキミも必要ないでしょ?』

片手に持った螺の先端を只野優斗に突き付けながら球磨川楔は宣言

した。

「お前ごときに出来るかな？私は常にお前の上で。お前は常に私の下だ。私の優位は揺るがない。」

ぐじゅる。と校舎が崩れる不快な音を合図に只野優斗と球磨川楔の異常で異常に異常な戦いが始まった。

この世に異常が居なければ並斗は普通に生きていける。

大丈夫。大丈夫だよ。並斗。何も心配は要らない。

異常は全て私が殺そう。

全てを殺し終わったら異常で異常に異常な私は消えるよ。この世に異常が生まれないようにしてからだがね。

だから並斗は自分の幸せだけを考えていれば良い。

私は並斗の為に生まれた人格なのだから。並斗が幸せになれば私も幸せだ。



**第四箱 ヤンデレな幼なじみに勝手に恋人扱いをされる只野並斗（前書き）**

作者の妄想です。

色々と崩壊していますがそれでも良いという方はどうぞ。

#### 第四箱 ヤンデレな幼なじみに勝手に恋人扱いをされる只野並斗

愉しそうな二人とは対称的に物凄く嫌そうな一人が印象的な三人組が箱庭学園に向かって歩いていった。時々二人に両腕を掴まれている一人が抵抗していたが。その一人の抵抗も虚しく三人組は箱庭学園に到着した。そして三人はそのまま球磨川楔の待つ二年一三組の教室に向かう。やはり一人は抵抗していたが残りの二人に強制的に連れていかれた。最後まで嫌がっていたその一人の名は只野並斗。球磨川楔の幼なじみで初恋の人で現在の恋の人で将来的には結婚を考えられちゃっている。要するに彼女に狙われている人である。本人は正直普通に勘弁して下さいと思っているのである。

「そついえば球磨川先輩が言っていましたが明後日から夏休みらしいですね。」

「へえーそうなんだ。それじゃ今年は楽しい夏休みになりそうだな。色々。全部終わったら皆でどこかに出掛けようぜ。勿論アンタも一緒に。」

「何故だろう。このままだと今年は最悪の夏休みになりそうな気がする。ああ、俺の事は普通に気にしないで結構ですから皆さんで楽しんできてくれ。でも球磨川だけは必ず連れて行ってね。頼むから。」



その後も何回か誘われたが。しかも何故か勝手に一緒に行くことにされていたが。丁重にお断りしながら歩いていると。二人の目的の場所で俺にとっては近付きたくない場所。二年一三組に着いてしまった。

この教室が二年一三組の教室だと表している式ノ13の表札の下に。式ノ-13。式ノ-13。参ノ-13。と書かれた紙が貼られているのを発見して。二学年を一つの教室に入れたら人口密度が多すぎて教室の中が寿司詰め状態になってるんじゃないかと普通に不安に思っている。

教室の中から。ドガガガガガッ！と激しい打撃音。ボゴオッ！と壁が壊れて抜ける様な音。グシャッ！と壁に叩き付けられる何かの音が聞こえた。

中で戦争でも起こってるのか？と思いながら二年一三組の教室を覗いてみると何故か教室には誰も居なかったが。黒板が有る筈の場所に大穴が開いていた。本当によく壊されるよなこの学校。

どうやら球磨川は壁を越えて。もしくは越えさせられて隣の教室まで移動したようだ。何故そんなことが解るかと言うとさっきまで無人だった筈の隣の教室から。というか普通に大穴から球磨川が誰かと会話している声が聞こえてきたからだ。

そしてその会話している誰かの声は最近聞いた覚えのある声で。普

通に忘れる筈のないあの先輩の声だった。

ああ、黒板と壁を壊したのは間違いなく貴方ですね日之影先輩。元  
とはいえ生徒会長が学校を破壊したら普通に駄目なような気がしま  
すよ俺は。

「球磨川先輩は隣の教室に居るみたいですね。どうやら球磨川先輩  
以外の人も居るみたいですが。」

相変わらず片手で俺の右腕を掴んだまま。空いているもう片方の手  
で片眼鏡を掛け直しながら執事服の彼はそう呟いた。

「それじゃさつさと隣に行こうぜ。あたしとの約束破って勝手にバ  
トった文句を言わねーとな。」

肉弾バトルは全部あたしにくれるって約束したのによー。と不貞腐  
れながらも未だに俺の左腕を片手で掴んだ状態のスリットスカート  
の彼女はそう言った。

「そうだな。早目に隣の教室に行こうか。」

色々と言いたい事があるからな。と両腕を掴まれた状態で球磨川にボロボロにされた制服を着た俺は言った。

「ん？どうしたんだ二人共そんなに驚いた顔をして。何か変なこと言ったか俺？」

「いえ、また嫌がるかと思ってました。」

「あたしもそう思ってた。」

「嫌がってもどうせ連れて行かれるからな。いつそのこと自分から行くことにしたよ。」

逃げるのを諦めたわけじゃないけどね。

壊れた机や椅子が散乱している二年一二組の教室の中では球磨川楔と前生徒会長日之影空洞が対峙していた。

「俺の異常性は「知られざる英雄」誰も俺を目視することはできず。誰も俺を記憶することはできない！」

『うん、どうやらそうみたいだな。』

『正直に言えばもう既に目の前に居るきみのことを忘れかけてるくらいだよ。』

『まあきみの異常性と僕の過負荷がちよっぴり近いとか。そんなことはどうでもいいとして。そろそろ恋人が来る頃だから。日之影くんには帰ってもらおうかな。ほら僕も一応女の子だからさ。身嗜みを整える時間が少しでも欲しいんだよね。』

拳を構える日之影空洞に語りかけながら身体の傷をまるで「無かったこと」にしたかの如く無傷に戻して。両手に螺を構える球磨川楔に脅威を感じた彼が距離を取ろうと後方に跳んだ瞬間。

「言いたい事は普通に色々と有りますが。とりあえず一言だけ言わせてもらいますね。誰がお前の恋人だア！」

いつの間にか球磨川楔の背後に忍び寄っていた只野並斗の怒りの籠った裏投げが普通に見事に炸裂した。

「只野！何でお前が此処に。それと恋人ってどういうことだ？」

「下校中にあの二人に捕まりまして。そのまま箱庭学園まで強制的に連行されました。まあそれで現在に至ります。あの女と恋人になった覚えは有りません。信じないで下さい。あの女の作戦です。俺の外堀を埋め立てる気です。」

珍しく驚いている日之影先輩に。球磨川を介抱している二人を指差しながら何故俺がこの場所に居るのか説明した。最後の質問は普通に力強く否定した。

「俺が止める」って言ったから任せただけ。意外と激しい奴なんだなアイツって。球磨川さん。大丈夫か？」

「激しい愛情表現ですね。凄い勢いで頭部が床に叩き付けられていたようですが。大丈夫ですか球磨川先輩。」

『只野くんが後ろから抱きしめてくれるなんて。』

いやんいやんと顔を真っ赤にしながら頬を押さえて笑顔で悶える球磨川を見た二人は。

「平気そうだな。」

「そうですね。」

普通に心配して損したと思った。

第四箱 ヤンデレな幼なじみに勝手に恋人扱いをされる只野並斗（後書き）

色々とやっちゃった感がありますが後悔はしていません。

こんな作者の妄想で良ければ次回もよろしく願いします。

## 第五箱 最悪の終業式（前書き）

作者の妄想です。

前回の終わりから少し時間が跳びます。

それでも構わないという方はどうぞ。



## 第五箱 最悪の終業式

三年十三組の教室で黒神めだか。名瀬天歌の二人は向かい合って椅子に座りながら前生徒会長日之影空洞の帰りを待っていた。話し込んでいる二人が気付かない内に既に教室の中に入っていた日之影空洞は何故か只野並斗を小脇に抱えながら二人に話し掛けた。黒神めだかは彼が無事だった事に喜んだ。名瀬天歌は小脇に抱えている奴は誰だよ。と心の中でツツコミを入れた。彼の小脇に抱えられた状態の只野並斗は「いい加減降ろして下さい日之影先輩。」と普通に頼んでいたが。「ともに歩けねー状態の奴は黙って抱えられてろ。」と断られていた。そのやり取りを見ていた現生徒会長黒神めだかは「おお、只野二年生ではないか。何故日之影前会長の小脇に抱えられておるのだ。」と彼が小脇に抱えられていたことに漸く気付いた。いや気付くの遅えよ。と三人は思った。

「俺は・十三組の奴等と接触してきたが。感想は。関わりたくない連中だった。としか言えねーな。戦うという形でさえ。嫌うという形でさえ。関わりたくないと思った。敵対したくもないくらい気分の悪い人間がいるなんて想像もしなかったぜ。」

苦虫を噛み潰したかのような表情で話し出す日之影先輩。まあ確かに普通は関わりたくないですね。特に球磨川とか球磨川とか球磨川とか球磨川とかには。

「黒神。お前は平気なのかよ。あんな奴等と向き合って。お前は正

気を保っていられるのか。」

「一人ではとても無理でしょう。私は貴方程強くはありません。貴方のように一人では戦うことなどできません。だけど皆がいるから私は貴方よりも強くなれる。」

黒神生徒会長は胸に手を当てながら凜とした表情で日之影先輩にそう言った。

「そうか……だが強いだけじゃ駄目なこともわかってんだろ？黒神。その皆とやらに会わせてもらうぜ。まあこいつを家まで届けてからだな。」

そう言いながら小脇に抱えた俺の事を見る日之影先輩。えーっと今の流れだと黒神生徒会長を優先するのが普通のような気がしますよ。忘れられていなかったのは普通に嬉しいですけど。

「確かに今の俺はまともに歩けない状態なんで家まで運んでもらえると普通に助かりますが。良いんですか？俺の家まで自転車でも三十分位掛かりますよ。」

あまり時間が掛からない方が良いんじゃないですか？と小脇に抱え

られた状態で日之影先輩を普通に見上げながら言いました。相変わらず大きいですねこの人。

「俺が本気で走れば五分程度で着くぜ。大して時間も掛からねーから安心しろよ。十分程待ってもらう事になるが。大丈夫か？黒神。」

「ええ、これは生徒会執行部の問題ですから。関係の無い只野二年生を巻き込むわけにはいきません。お姉さまもそれで宜しいですか？」

そう言つて。包帯で顔を隠した女の子に確認を取る黒神生徒会長。まあ生徒会には普通に関係無いよな俺は。生徒会に、はな。

「何でそいつが前生徒会長さんの小脇に抱えられてんのかは気になるがね。まあそれは後で聞けばいいか。別に構わねえさ。運びたいや勝手に運べよ。」

包帯で顔を隠した女の子は椅子に座りながらぶつきらぼつにそして投げやりにそう言った。俺はきみの顔に巻いた包帯に何でナイフが刺さっているのが普通に気になる。

「よしそれじゃあこいつを配達し終わったら旧校舎に向かうからよ。ゆっくり茶でも飲んで寛いで待つてな。さーて超特急で走るぜ。」

そう言いながら何故か窓を開ける日之影先輩に。

「何で窓を開けるんですか？」

と俺が聞いたら。日之影先輩は普通に爽やかな笑顔で。

「近道するからに決まってるんだろ。」

とんでもないことを言い出しやがりました。

普通に階段使つて下さい。と何回も頼みましたがそんなことは完全に無視して窓から身を乗り出す日之影先輩。ああもう止められないな。

小脇に抱えられた状態で空を落下しながら。今日は厄日だな。と俺は普通にうんざりした。

その後はノンストップで家まで届けられたが。何かもう普通にジェットコースターみたいだったとしか言えない。

家まで届けてくれた先輩に感謝をした後。家の中に入ったら。玄関で倒れて普通にそのまま眠ってしまい。起きたのは翌日の朝だった。まあ寝てしまったものは仕方ないので。とりあえずボロボロの夏用の制服を脱いでから。軽くシャワーを浴びて普通に汗を流し。ボロボロじゃない冬用の制服を着て。普通に朝食を作り。普通に食べて普通に歯を磨き。普通に鞆を持って家を出た。

登校中。他の学生達が夏休みの予定を話しながら楽しそうに歩いていた。

それを見て。俺は夏休みに何をしようかな？と普通に考えていたら。いつの間にか箱庭学園まで辿り着いていた。

考えは纏まらなかったが。とりあえず二年一組の教室に行き。クラスメイトに普通に挨拶をした後。教室の自分の机に普通に鞆を置いてから体育館に向かった。

生徒達の整列も終わり。

「それでは。これより本年度一学期終業式を」

壇上に立った黒神生徒会長が終業式を始めようとしていた。その瞬間。

「ふぁいひふる。」

突然現れた球磨川楔が黒神生徒会長の両頬を引つ張って邪魔をした。今時小学生でも普通にやらない悪戯すんなよ。

そして黒神生徒会長を押し退けてマイクを手にする球磨川楔。何する気だよあの女。普通に嫌な予感しかないんだけど。まさか恋人宣言でもする気か？

『やつほー。箱庭学園の皆さん。はじめまして！僕は只野楔！只野並斗くんの奥さんでーっす！！』

彼女が全校生徒に聞こえる大きな声でそう言った瞬間。俺の周囲に居た生徒達が一斉に此方を振り向いて俺の事を凝視した。

言っておくが俺は籍なんか入れてないぞ。それにゴールインもしてない。初めての共同作業と称してケーキを真つ二つにもしてない。病める時も健やかなる時も愛し合うことを誓ったことも無い。とい

うか結婚が可能な年齢は男が18歳で女が16歳だ。俺は男で16歳だから結婚自体が出来ないんだよ。だから俺の左手の薬指を見るのを止めるお前等。指輪なんか着けてないから。

『というのはもちろん冗談で今はただの恋人だから今の僕は球磨川楔なんだけどね。まあ将来的には只野楔になることが決定してるから。あながち冗談とは言えないかな。あはっ！只野くんを狙っていた人は残念でした！。他の人を探してね！。』

きつといい人が見つかるよ！。と笑顔で言う球磨川。徹底的にやるつもりだあの女。俺の僅かな恋愛の芽まで摘む気だ。普通にヤバイ。

「貴様と只野二年生の交際関係など。このような場で発表するものではないだろう。何の用だ球磨川。今壇上に上がってよいのは生徒会役員だけだぞ。」

険しい表情で球磨川を睨み付けながら黒神生徒会長はそう言った。

『まあ言いたい事は大体言ったから。もう帰っても別に良いんだけどね。きみと同じこの学校に通う者として注意しないといけないことがあるからさ。』

『箱庭学園学校則第45条第三項は知ってるかな。めだかちゃん。』

「第45条は生徒会執行部の罷免に関する条目だな。第三項はその詳細で「生徒会執行部に明白な不備がある場合。全校生徒の過半数の署名をもって役員は即日罷免される。」という内容だった筈だが……まさか貴様！」

『そのまさかさ。副会長の不在。これは誰が見ても明白な不備だね。生徒会長としての業務を怠ってはいけないな。さて、全校生徒の過半数の署名も有ることだし。ここは署名をしてくれた皆の代表として僕が言わせてもらおう。』

何処からか取り出した紙の束。恐らく署名を片手にポーズを決めながら。

『生徒会長黒神めだか。きみに解任請求を宣言する。』

球磨川楔は宣言した。

ああ、普通に最悪な終業式だ。



## 第五箱 最悪の終業式（後書き）

前回と今回の間の空白はいずれ番外で書きます。

それでは次回も宜しくお願いします。

## 第六箱 不法侵入と器物破損（前書き）

作者の妄想です。

今回は少し読みにくいかもかもしれませんが。それでも宜しい方はどうぞ。

## 第六箱 不法侵入と器物破損

ふと気が付くと俺は教会の様な場所に居た。そして何故か真っ白なタキシードを普通に着ている俺は祭壇の近くに立っていて。ウェディングブーケを持って純白のウェディングドレスを身に纏い純白のベールで顔が隠された女性が年配の男性にエスコートをされながら入場してくるのを見ていた。エスコートをしていた男性が娘を頼むよと小声で言いながら俺に彼女を引き渡した所で。これは結婚式の真っ最中だということに漸く気付いた。聞こえる賛美歌。そして牧師の誓いの言葉。その言葉に隣の彼女は『誓います』と言った。俺も言わないと普通にマズイ様な気がするが。俺の中の何かが言うなと叫んでいるので俺は言わなかったが。問題も無く式は進み。指輪の交換をする事になった。そして俺と彼女は互いの指輪を交換し。それを見届けた牧師が「それでは誓いのキスを」と言った。俺は彼女の純白のベールを優しく掴み。上に持ち上げた。ベールの下の彼女はとても幸せそうに微笑む。

どうみても球磨川です本当にありがとうございました。

「ゆ…夢か。良かった。普通に夢で。」

しかし何であんな夢を見たんだろう。ん？枕の下に何か入って……  
式場案内とウェディングドレスのカタログに球磨川の写真。うん、  
こんな物入れるのは普通に一人しか居ないな。

「勝手に俺の家に侵入して何やってんだ。あの女は。」

というかどっから入って来やがったんだ。と思つて部屋の中を見回したら。普通に窓ガラスが無いことに気が付いた。成る程其処から入って来たんだな。ってふざけんな。マジでふざけんな。

「ガラス元に戻せやアアアア！」

七月十八日。朝の7時30分。只野並斗の叫びが住宅街に普通に響き渡った

その前日の七月十七日。球磨川楔は生徒会長黒神めだかに解任請求を宣言した。それに困惑する生徒達に驚愕する生徒会役員と普通に転校を考える俺。何故なら解任請求者は時期選挙までの間は臨時で生徒会長を務めなければならないという決まりがある。だから転校してきたばかりで本来は立候補資格の無い球磨川でも生徒会長になる事が出来てしまう。球磨川が生徒会長の学校に俺は普通に通いたくない。それに全校生徒に勝手に恋人宣言もされたので誤解している奴も普通に何人が居るだろうしな。そして俺が何処の学校に通おうかと考えている間にも『授業及び部活動の廃止。直立二足歩行の禁止。生徒間における会話の防止。只野くんの衣服着用への厳罰化。手及び食器等を用いる飲食の取締り。只野くんの不純異性交遊の努

力義務化。奉仕活動の無理強い。永久留年制度の試験的導入。只野くんの三年・十三組への飛び級。』という普通にとんでもないマニフェストを言う球磨川……ちよつと待て何か普通に変なの何個があった。『以上九点の実現に向けて一生懸命頑張ることをここに誓います。』普通に誓うな。『みなさん応援して下さい。』誰が応援するか。

『なお前生徒会の負の遺産である目安箱は当然この僕が引き継ぎますね。困ったことがあったら遠慮せずになんでも言っして下さい。24時間365日。僕は誰からの相談でも受け付けます!』

うん、頼むから普通に死んで下さい球磨川先輩。って手紙を普通に百通位投入しよう。

しかし俺がそんな普通に地味な嫌がらせをやるうと決意している間に。

黒神生徒会長によって事態は変わっていた。

球磨川率いる新生徒会と黒神生徒会長の現生徒会の決闘という明らかに普通じゃない。そして前代未聞の生徒会選挙。否。生徒会戦選挙へと。

まあ俺は普通に嫌がらせの方法を考えていてあまり良く聞いてなか

つたから普通に隣にいた人に聞いた話だけだね。

その後は。一応終業式は終わりみたいだったから。とりあえず普通に教室に戻って。球磨川と付き合ってたんだろ？と茶化してきたクラスメイトを普通に締め落として無理矢理椅子に座らせ。普通に先生から成績表を受け取り。普通に家まで帰った。

そして普通に服を着替えてスーパーに行き。普通に食材と洗剤を力ゴに入れてレジに向かい。普通にビニール袋に入れて家に帰り。普通に夕食を作り。普通にテレビを見ながら食べ。普通に風呂に入り。普通に歯を磨いて。普通に布団で寝た。

そして冒頭に戻り。

七月十八日。朝7時35分。

「窓ガラスが影も形も無いんだけど。どうしてくれんだよコレは。普通に破片すら見当たらないし。」

普通にどうやったんだよ。と俺が疑問に思っていると。枕元に置いた携帯にメールが届いた。

送り主は日之影先輩で「直接話したい事と頼みたい事があるから学

園まで来てくれねーか？」という内容でした。

「そういえば夏休みの予定はまだ決まっていませんでしたね。」

決まるまで普通に暇ですし。

「まあ普通に球磨川には関わりたくありませんが。それ以上に日之影先輩とか善吉くんには関わりたいと思っていますからね。あと人吉先生にも。黒神生徒会長は微妙ですが。」

それに球磨川に無くされた窓ガラスの代金を請求しないといけませんね。

窓ガラスは普通にタダじゃありませんから。

そう言いながら普通に学生服に着替えた後。

それにしても日之影先輩の話したい事と頼みたい事ってなんでしょうか？と考えながら只野並斗は箱庭学園に向かった。

冬服だから普通に暑いですね。

ガラスの序でにボロボロにされた夏服の代金も請求してやりましようかね。

とりあえず今は普通に上着を脱いで行きましよう。



## 第六箱 不法侵入と器物破損（後書き）

壊したら弁償しないと駄目ですよね。

人間関係がギクシャクしますから。

最初の結婚式は実はかなり短かったんですが。知人には長くした方が面白いとアドバイスされたので長くしてみました。

次回も宜しく願います。

**番外の二箱 新入生と生徒会長（前書き）**

作者の妄想です。

それでも宜しい方はどうぞ。

## 番外の二箱 新入生と生徒会長

今日から俺も普通の高校生だ。

中学時代は破壊臣という正直普通に恥ずかしいと思わないのかその呼び名。と思わないでもない不良くんに襲撃されたりもしたが。不良くんは普通に改心したみたいだし。今度は普通の学生生活が過ごせるように頑張ろう。

そう俺が決心した頃には。入学式も終わり。体育館の外に出ると既にもう部活動の勧誘が始まっていた。

特に運動部が活発に勧誘しているようだったけど。

俺は普通に文化部に入りたいので勧誘を丁重にお断りしていた最中、突然後ろから誰かに肩をガシッと掴まれました。しかも結構強い力で。

「何ですか？」

と言いながら振り向くと、其処に居たのは。

「柔道………やってみいひんか？」

柔道着を着た女性だった。

肩を掴んでいる力が普通に強かったので女性じゃないと思っていたから。これには普通に驚いたけど。

「すいません。普通に運動は苦手なんです。」

運動部には絶対に入らないと決めていたので普通に断った。

「いやいや嘘はあかんよ。大分鍛えられとるやんキミの身体。並みの鍛え方じゃ。こうはならんよ。」

渾身の力で掴んどるんやけど痛がつとらんしな。と笑顔で言う柔道部の人。

「いや普通に痛いですよ。まあそれはともかく手芸部が俺を呼んでいるような気がするのです。」

それでは失礼します。と言いながら逃げようとしたけど。

「逃がさへんよ！こんな逸材を逃してたまるかい！」

何故か勝手にヒートアップする柔道部の人。普通に怖いんですけど。何なのこの人。

「キミなら反則を極められる！ウチの目に狂いは無い！さあ一緒に柔道を！」

「極められません。普通に狂いまくりだと思います。柔道はやりません。普通に勘弁して下さい。」

通う学校間違えたかな？と普通に思ってしまった位、押しの強い先輩に俺が困っていると。

「落ち着け！新人生が怯えてんだろ！」

それを見兼ねたのか柔道部の隣で勧誘をしていた水泳部の人が無言で助けてくれました。

「何や！邪魔する気か水泳部！ってコラ離さんかい！」

「俺がコイツを抑えている間に逃げるんだ！」

柔道部の人を羽交い締めにして抑えている水泳部の人にそう言われたので。普通に全力で走って逃げました。ありがとうございます水

泳部の人。このご恩は忘れません。

「柔道部の勧誘の邪魔すんなや！屋久島アアア！」

「アレの何処が勧誘だ鍋島アアア！」

後方で言い争う二人の声を聞きながら。柔道部とあの先輩には普通に近付かないようにしよう。と固く決意した。

「今度水泳部の先輩には普通にお礼を言いに行こう。」

とりあえず普通に今日は帰ろうかな。明日から忙しくなりそうだし。

学園から出ようと校門まで向かうと其処には。

「なあ本当にこの学校に破壊臣が居るのかよ？」

「ああ、俺はアイツと同じ学校だったからな。進路を知るなんて簡単な事だ。アイツがこの学校に入学したのは間違いない。」

「まあ、俺は暴れられるならどうでもいいや。」

「なら聞くんじゃないよ。」

見るからに柄の悪い奴等が数人立っていた。しかも破壊臣とか言っていたから。間違いなく不良くん関係。というか普通に俺と同じ学校かよ不良くん。

まあ不良くんがフルボッコにされようが俺には普通に関係無いから無視して通り過ぎようとしたら。

「おい、そこのお前。阿久根連れてこい。」

と話し掛けられた。

「いや阿久根って普通に誰？」

普通に知らなかったので聞いてしまった。

「阿久根は阿久根だろうが。嘗てんのかてめえ。」

「だからその阿久根が誰か解らないから普通に聞いてるんだよ。誰だよ阿久根って。名前も知らない奴なんか普通に呼んでくれるわけないだろ？説明できないんだったら普通に他の奴に頼んでくれませんかね。というか寧ろ普通に自分で行けばいいんじゃないの。普通に無駄な事してないでな。」

柔道部の人に絡まれて普通に精神的に疲れていたので思ったことを全部正直に言ってしまった。

「破壊臣を潰す前にコイツ潰すか？」

「そうだな。」

「ああ、もしかして破壊臣の名前が阿久根って言うの？破壊臣なら普通に知ってるぞ。金髪ロン毛の露出の多い不良くんだろ？」

更に火に油を注ぐとても正直な俺の口。普通に喧嘩売ってるような気がする。

「やっぱり知ってんじゃねえか！ふざけやがって！」

と言いながら木刀を振りかぶる柄の悪い男。ああ、やっぱりキレたか。

振り下ろされる木刀を避けようと俺が普通に後ろに下がった瞬間。

「ウチの学園の生徒に何してんだ。」

突然現れた巨大な男が木刀を握っていた男の頭を掴んで地面に叩き付けていた。



地面に若干顔がめり込む程の力で叩き付けられた男はびくびくと痙攣……いや普通に大丈夫なのかアレは。

「よ、吉田アアア！」

柄の悪い男Aが痙攣している奴を見ながら叫んだ。ああ、あの痙攣している人は吉田って名前なんだ。

「何だてめえは！」

柄の悪い男Bは巨大な男を睨み付けてそう言った。Bの足が若干ブルブル震えてるのは普通に見なかった事にしておこう。

「あ、俺用事思い出したから帰るわ。」

そう言つて柄の悪い男Cはさっさと走つて逃げた。うん、明らかに勝てないって解つたら普通は逃げるよね。誰だつてそうする俺だつてそうする。

その後は逃げたC以外の二人は巨大な男に普通にボッコボコにされていた。

因みに殴っている巨大な男の腕に生徒会長の腕章が有ることに普通

に気付いた俺は、いや生徒会長が殴つちや普通に駄目だろ。と思っただけ。余計な事を言ったら俺までボッコボコにされるかもしれない。とも思っただけで言わなかった。

不甲斐ない俺を許してくれ。柄の悪い男AとB。と両手を合わせて拝むことしか出来なかった。

「無事か？新入生。」

両拳が若干赤い生徒会長が話し掛けてきた。普通に赤い何かが手に付着してますよ。

「ええ、俺は普通に無事ですけど。そこに倒れてる三人は大丈夫ですか？」

三人とも普通に仲良く痙攣してますけど。

「初仕事だからちよつと張り切り過ぎちまったなー。」

やり過ぎたかもしれん。と頬を掻いている生徒会長。明らかにやり過ぎですよ。

「とりあえず救急車呼びましょうか。」

「いや、この程度なら保険室に運べば大丈夫だ。」

柄の悪い男AとBを両脇に抱える生徒会長。

「手伝いますよ。貴方に任せて放置したら普通に駄目な気がします。保険室の場所は何処ですか？」

柄の悪い吉田くんを背負いながら生徒会長にそう聞きました。

「俺一人で運べるから手伝いは要らねーよ。」

「それじゃ、新入生だから保険室の場所が普通に解らないんで。保険室の場所を教えてくださいませんか？生徒会長さん。」

「そー来たか。解った解った。案内するよ。」

「ありがとうございます生徒会長。ってどうしたんですか？眉間にしわ寄せて。」

「いや、ちょっとむず痒くてなー。生徒会長って響きがよ。着任したばかりだからなー。」

「ああ、普通に初仕事って言ってましたからね。」

「まさか初仕事を新入生に手伝ってもらう事になるなんて思ってたけどなー。」

「お、着いたぜ。此处が保険室だ。」

足で入り口を開けて保険室の中に柄の悪い男AとBをポイツと投げた後。俺の背負っていた吉田くんをヒョイツと普通に片手で持ち上げる生徒会長。結構吉田くん重かったんだけどな。

「後は俺に任せときな。」

そう言っただけで保険室の中に入っていく生徒会長に。

「助けてくれてありがとうございました生徒会長。」

深々と頭を下げながらそう言った。

「あー生徒会長って呼ばれ慣れるまで時間が掛かりそうだからよ。名前で呼んでくれねーか。俺の名前は日之影、日之影空洞だ。」

頬を掻きながら恥ずかしそうに照れながら生徒会長……日之影先輩はそう言った。

「俺の名前は只野並斗です。これから宜しくお願いします。日之影先輩。」

俺は普通に笑顔でそう言った。

これが生徒会長日之影空洞と只野並斗の最初の出会い。

番外の二箱 新入生と生徒会長（後書き）

今回は只野くんと日之影先輩が初めて会った時の話でした。

うん、普通にタイトルでバレバレですね。

こんな作品ですが次回も宜しくお願いします。

**第七箱 知りたくなかったこと（前書き）**

更新が遅れてすみません。

作者の妄想です。

少し短かいですがそれでも宜しい方はどうぞ。

## 第七箱 知りたくなかったこと

箱庭学園に向かう途中でどう見ても普通に黒子にしか見えない集団。箱庭学園の選挙管理委員達とすれ違った。何故か全員旅行鞆を持っていたので、選挙管理委員総出で旅行にでも行くんだろうか？と一瞬考えたりもしたけど。選挙管理委員達が生徒会戦挙に関わらない筈がないし、普通に旅行に行くなら学校行事じゃないんだから私服で行くだろう。選挙管理委員の服を着て行くんだから普通に行事に関係のある事だよな。沖縄とハブって単語が普通に聞こえたりもしたけど。きつと行事に関係あることだよな。うん、深くは考えない様にしよう。それにしても選挙管理委員達のあの服って全身が隠れてるけど。普通に暑くないんだろうか。間違いなく暑いと思うんだが。普通に誰も暑そうにしてなかったんだよな。

何でだろう？と普通に不思議に思いながら歩いていると漸く箱庭学園の校門が見えてきた。そして校門前に門よりも身長が普通に高い日之影先輩が立っているのも見えたので。とりあえず歩くのを止めて先輩の前まで普通に走った。

「よー！遅かったな只野。待ち草臥れちまったぜ。」

片手を上げて陽気に笑顔で挨拶してくる日之影先輩。こんな普通に暑い日でも元気ですね貴方は。



「お待たせてしまつて申し訳ありませんでした日之影先輩。と  
いうか普通に外で待っているなら先にそれを教えて下さいよ。」

「ついさっきまで合宿の準備で時計台の地下に居たんでな。それほ  
ど長い時間外で待つてた訳じゃねーから心配は要らねーよ。」

「そうですか。それなら大丈夫ですね。それではメールに書いて有  
った「話したい事と頼みたい事」とは何でしょうか？と単刀直入に  
聞きたいところですが。とりあえず普通に暑くて仕方ないんで校舎  
内に入りませんか？」

「そうだな。校舎じゃなくて時計台の地下でも良いか？」

「此処より涼しい場所なら普通に何処でも構いませんよ。それでは  
時計台に行きましょう。」

その後。時計台へ向かっている途中。

「校門の前で会った時から気になってたんだが。痒くないのかそれ？」

俺の首を指差しながら先輩がそう言った。

「俺の首に何か有るんですか？」

「赤い跡が首筋に残ってるぞ。蚊にでも刺されたんじゃないか？」

「赤い跡ですか。」

全然痒くないから普通に気付かなかったんですけど。寧ろ本当に蚊に刺されたんでしょうか。蚊に刺されたら普通は痒くなると思うんですが。何か別の理由が有って赤くなってるんじゃないか……もしかして俺が寝てる間に部屋に侵入して枕の下に色々と詰め込みやがった球磨川が。それだけに飽きたらず俺の首筋にまで魔の手を。

うん、そんな事は有り得ないと言えないのが普通に恐ろしい。

先輩には言えない。これは普通に言えない。例え想像の段階でも言えない。もしかしたら違うのかもしれないけど言えない。言ったら絶対に誤解される。間違いなく誤解されてしまう。

「普通に蚊です。間違はなく蚊です。あ、痒くなってきました。これは蚊に違いない。蚊以外である筈がありません。」

もしかしたら本当に蚊なのかもしれないので赤くなった原因は蚊だという事にしておこう。と思ったのでそう言っただけですが。その矢先に。

「んー？良く見ると蚊にしては跡が大き過ぎる様な気がするぜ。それと薄いけど歯形みてーなものも見える様な。」

俺のささやかな希望を粉碎する日之影先輩。聞きたくなかった一言を普通に言わないで下さい。そしてお願いですから歯形とか言わないで下さい。何か更に悪化してんじゃないですか。普通に知りたくなかった。それは知りたくなかった。

「それは普通に気のせいです。間違はなく気のせいです。さあ時計台まで普通に行きましょう。普通に急ぎましょう。」

俺は動揺を隠す為に早口でそう捲し立てると、時計台に向かって普通に走り出した。

普通に知りたくなかったことを知り。若干精神的なダメージを只野並斗が喰らったりもしたが二人は時計台に到着した。そして地下に階段で下りながら二人は再び会話を始める。

「そう言えば合宿の準備と言ってましたけど。部活でも始めたんですか？日之影先輩。」

普通に気になっていたことを聞いてみると。

「部活は始めてねーよ。ジジイが運動なんか出来る訳ないだろう。それに合宿は合宿でも。部活でやるような生易しい合宿じゃないぞ。凶化合宿と言う名の。この箱庭学園が黒箱塾だった時代から代々受け継がれてきた。伝統的なメンタルトレーニングだ。まあ過酷過ぎるという理由で廃止された曰く付きの鍛錬法なんだが……只野も一緒にやるか？」

地下五階の駐車場でやってるぜ？と爽やかな笑みを浮かべながら日之影先輩はそう言いました。相変わらず普通に笑顔でとんでもない事を言いますね先輩は。

「いや過酷過ぎて廃止になった鍛錬法なんて明らかに普通じゃないですよ。頼まれようが普通はやりませんよ。もし日之影先輩が俺に頼みたい事がそれだったら俺はもう帰りますからね。」

俺はじりじりと普通に後退りしながら日之影先輩にそう言った。

「冗談だよ。だから後退りすんの止めろって。お前にはメンタルトレーニングなんか必要なのは俺も解ってる。鍛える前から文句無しに合格だ。」

良かったな。と言わんばかりの先輩の表情が物凄く不安なんですけど。

「合格って一体何に合格したんですか俺は。」

それを教えて下さいよ。と日之影先輩に頼みましたが。

「まあ詳しくは地下二階の庭園に着いたら話すからよー。今は先に進もうぜ。」

日之影先輩はそう言っただけで教えてはくれませんでした。

「解りました。普通に気になって仕方ないんで。さっさと地下二階に行きましょう。」

只野並斗はそう言う勢い良く階段を駆け下りていった。

一方その頃。球磨川楔は。

無言で。しかし、にこにこ心の底から嬉しそうな笑顔で持っている全機種の携帯の待ち受けを。家に侵入した時に撮影した只野並斗の寝顔の写メに変更していた。

第七箱 知りたくなかったこと（後書き）

枕の下に色々と詰め込むだけでは彼女は帰りませんでした。

まあ目の前に獲物が寝ているのに何もしない肉食獣はいませんよね。

こんな感じの作品ですが次回も宜しくお願いします。

特別の箱 バレンタインデー（前書き）

作者の激しい妄想です。

殆ど一ページというふざけた文量です。  
本編とは全く関係有りません。

それでも宜しい方はどうぞ。

本編書かないで何書いてるんだろう。



## 特別の箱 バレンタインデー

バレンタインデー。

2月14日に祝われ、世界各地で男女の愛の誓いの日とされる日であり。

日本では女性が男性に親愛の情を込めてチョコレート贈る日である。

そんな日に球磨川楔が只野並斗にチョコレートを贈らないわけもなく。

「『さあ受け取って只野くん。』僕の愛が溢れてしまいそうな程詰まりに詰まった手作りのチョコレートだよ。』勿論義理何て残念な代物じゃなくて本命の本命の大本命だから安心してね。』あ、それと只野くんの下駄箱に生ゴミが入ってたから捨てておいたよ。』  
『うん、良いことをすると気分が良いね。』  
『ああ、でも当然のこととしただけかな？』  
『だってゴミはゴミ箱に入れるのが普通なんだから。』  
『そうそうゴミの代わりに只野くんが大好きなチョコレートを山ができる程沢山詰めておいたよ。』  
『それも全部僕の手作りなんだけど、只野くんなら勿論食べてくれるよね。』」

可愛らしいリボンで綺麗に包装された箱を差し出して、にっこりと笑顔でそんな事を言う球磨川楔に。

「いやお前この中学校の生徒じゃないのに何で普通に居るんだよ。」

帰れよ自分の学校に。と普通に嫌そうな顔できっぱりとはつきりと只野並斗は言った。

「『帰れなんて酷い。』『酷すぎるよ只野くん。』『僕はチョコを受け取ったきみが喜ぶ顔が直接見たかったから渡しに来ただけなのに。』『至近距離で喜んでいる只野くんを舐める様に見たかっただけなのに。』『』」

酷いや酷いや。と涙を流しながら言う球磨川。いやお前の思考回路の方が普通に酷いと思う。舐める様について……普通に寒気がしてきただけだ。

「うん、何かお前帰るつもり無さそうだし。俺が帰るわ。普通に具合悪くなってきた。」

「『大丈夫だよ只野くん。』『僕の作ったこのチョコを食べれば直ぐに元気になるよ。』『ほら、口を開けて只野くん。』『』」

素早くリボンを引き千切り、手早く包装紙を引き裂いて、箱の中から螺子型のチョコレートを一つ取り出す球磨川。直ぐに元気になるって普通に何が入ってるんだよ。そのチョコの中には。

「家で普通の薬を飲むから。そんな怪しいチョコは普通に要らん。」

「『本当に元気になるのに。』 『僕は只野くんにはだけは絶対に嘘は言わないって昔約束したでしょ？』 『だからいつも本当のことしか言ってないよ。』」

「まあ元気になるのは本当の事だとは思っけどな。本当に元気になるだけか？」

「『仕方ないなあ。』 『只野くんの事が心配で心配で堪らないから。』 『無理矢理食べさせる事にするよ。』」

「やっぱり何か入ってんだろ！言わないって事がその証拠だぞ！」

「『え、口移しが良いの？』 『しょうがないなあ。』」

そう言って球磨川はチョコを自分の口の中に放り込んだ後、俺の両

肩をガシツと掴み。恥ずかしそうに頬を赤く染めながら目を閉じたまま顔を此方へ徐々に近付けて……

「普通に話が噛み合わないんだけど。一言も言ってねえよそんな事！恥ずかしいなら普通にやるなよ。って普通に力が強いんだけど！ちよつと止め。逃げられな。誰か助け、んむー！？」

その後何が有ったのか、知っているのは本人達だけである。

## 特別の箱 バレンタインデー（後書き）

2月14日の夜の11時位に思い付いたのでつい書いてしまった。

しかし書き終わった時。既に2月15日に日付が変わっていてバレンタインが終わっていたが。

構わねえ投稿しちまえ！と思ったので投稿しました。

後悔はしていない。

因みにこの話は本編とは一切関係無い話です。

## 超番外の番外の箱 名探偵だよ優斗くん（前書き）

更新がもの凄く遅れてすいません。相変わらずの作者の妄想ですが、それでも良い方はどうぞ。因みに本編とは全く関係ありません絶対ありません。似たような事は有ったかもしれませんが。

超番外の番外の箱 名探偵だよ優斗くん

「何か事件がないだろうか」

「事件なんかない方が良さだろ」

「退屈ではないか。」

「『やあ』『おはよう』『僕の並斗くん』『オマケの優斗くん』」

「ちょっと火だるまで崖から転落したまえよ球磨川」

「『朝の挨拶に恐ろしい提案で返さないでほしいな』『それに悪いけど並斗ちゃんと結婚する前に死ぬつもりはないよ優斗くん』」

「冗談はよせ球磨川。並斗が貴様の様な女と結婚するわけなからう。なあ並斗。」

「俺にそういう話振るなよ。聞かなかった事にさせといてくれよ。」

「うむ、解った。これから球磨川関係の話は振らない様に努力しよう。では用が無いならさっさと消えて失せる球磨川。私はこれから並斗と学校に行くのでな。」

「『置いてかないでよ』『一緒の学校なんだから一緒に行こうよ』それが嫌なら並斗くんだけ置いてってよ」

「優斗。嫌かもしれないけど……俺も普通に嫌だけど。連れてかないと面倒な事になりそうだ。」

「並斗がそこまで言うなら仕方がない。一緒に通学する事を許可しよう。だが並斗に接触する事は許可しない。触れた瞬間丸太の様な私の足が、貴様を蹴り飛ばす事を約束しよう」

「最近俺の私物が盗まれるんだよな。」

「変質者だな。全く許せん奴だ。球磨川か？」

「『僕じゃないよ』『さつきから言いたい放題だね優斗くん』『まさか変質者扱いされるなんて』『僕はただの愛の狩人さ』」

「優斗。大変だ。」

「どうした並斗。吉田の父が温泉旅館で毒殺でもされたのかね!？」



そこに鉄道のダイヤを利用したトリックが絡んでくるのか!？」

「『優斗くんの事件に対する高望みが天井知らずだね』」

「悪い。そこまでの事件を期待されると言いにくいんだけど。大変なんだ俺の机が。」

「まさか机に爆弾でも仕掛けて有ったのか!？己れ吉田!？」

「いや爆弾は無いからな。俺の机が荒らされてただけだから。つか吉田くんが何かしたのか優斗?さつきから普通に吉田くんの名前ばっか出てくるけど。」

「何だと!？並斗の机が荒らされていたと!？吉田は並斗が私に作ってくれた弁当のオカズを奪ったのだ万死に値する。」

「ああっ、優斗の目が急に鋭くなった。相変わらず瞳孔開いてて恐い。」

優斗くんの目が鋭くなったそれはつまり犯人の目星がついたってことだ。優斗くんは推理が冴えた時目がやけに鋭くなって瞳孔ガン開きになることから別名「推理が冴えるのは良いけど瞳孔メツチャ開いてて恐っ!」と言われる程なんだ。

「『さあ犯人の正体があばかれるぞ』 誰なんだ』」

「『一体誰が犯人だって言うんだ』 『くそう机から頭が抜けないぞ』  
『あ、でも並斗くんの匂いがする』 『これは素晴らしい』」

「『見事な推理だったよ優斗くん』 『確かに並斗くんの机を荒らしていたのは僕だよでも勢い余って頭が挟まったのは故意じゃないわけだし』 『荒らしてたって言うって聞こえが悪いけど何か良いものがないか物色してただけでそれも悪意が有ったかと言えば僕のみぞ知る所なわけだし』 『勿論並斗くんへの愛は溢れんばかりに満ち溢れているけどね』」

「優斗。通報」

「勿論だ。並斗。」

「『待つて通報しないで』 『反省しているんだ』 『そもそも良いものがあってもそれを盗むかどうかは僕の判断なわけで』 『そりや欲しいけど』 『思わずポケットに忍ばせてしまうけど』 『忍ばせているだけで盗んでいるわけじゃ』 『通報止めてってば』」

「貴様が反省しておらぬから通報するのだ。」

「どうせこの前無くなった俺の体操服もお前が盗んだんだろ！」

「『違うよ決めつけないでよ』『僕はこう見えてある種の淑女で通ってるんだ』『そんな見境なく並斗くんの私物を盗んだりしないよ』『確かに心惹かれるものはあるけど』『盗んだりしないよ』」

「犯人が他に居ると言っただな。」

「『そうさ』『良い迷惑だよ僕のせいにされてどんな奴か知らないけど困った奴だよ全く!』『いや球磨川って名前だからクマった女だよ全く!』」

「優斗。通報」

「勿論だ。並斗。」

## 超番外の番外の箱 名探偵だよ優斗くん（後書き）

色々とありましたが私は元気です。

優斗くんはもう出ないって言ってたがすまんありや嘘だった。

彼はこれからちよくちよく番外で顔出しするかもしれませんが。二重人格ではなくただの弟として。普通の兄弟としてですが。

次回からは本編を書きます。

今回はリハビリの様な感じですが。台詞だけですいません。というか題名で解った方は解ったと思いますが。今回は名探偵だよ！うさみちゃんのパロディです。いやもう何かすいません。やってみたかったんです。

こんな作者ですが次回もよろしくお願いします。

知人が只野くんは何時裸エプロンになるんだ？と聞いてきたんですが。私はどうすれば良いんでしょうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7674p/>

---

普通で普通な普通の人

2011年7月16日05時09分発行